# 「主イエスが、それに目を留められた」

マルコによる福音書１２章３８－４４節

森島　牧人　牧師

マルコ福音書は全体で１６章ありますが、今日のところは主の教えの最後の部分で、十字架の死を前にされたこの主イエスの厳しい御言葉には、胸に迫るものがあります。

ついに主イエスが入城された時期、都エルサレムではユダヤの三大祭りの一つ、過越祭が近づいていて、その神殿の境内は、遠く近くからやって来た多くの人々で、ごった返していました。主イエスとの論争に完敗したユダヤの指導者である祭司・律法学者・長老たちが主を陥れようと謀る中、いつものように境内で教えておられた主イエスは、「律法学者に気をつけなさい。・・・」（マルコ１２：３８－４０）と言われました。願い通りに社会的な地位や人々の尊敬を得た律法学者らが、それに付随する責任を負わず、むしろユダヤの戒めに逆らって寡婦や孤児を不当に苦しめていると、糾弾された故の主の発言でした。

しかし、厳しいこの主の言葉、これは律法学者だけに向けられたものではなく、当時の弟子たちや今を生きる私たちキリスト者の、堕落し世俗的になった教会生活にも向けられていると、深く受け止めなければなりません。つまり、ここで、神殿の境内で繰り広げられた主イエスの言葉と行動の締めくくりとしての出来事が、起こったからです。

その舞台は、神殿の聖なる場所の外側にある、「婦人の庭」と呼ばれる目立たないエリアでした。壁には角笛を逆さまにしたような賽銭箱が１３並んでいました。聖書には「イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子をみておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚・・・を入れた。」（同１２：４１－４２）とあります。レプトン銅貨２枚は今の日本で言えば５０円硬貨２枚といったところで、少額ではありますが、寡婦である彼女にとっては、生活費の＜すべて＞でした。その銅貨２枚を、彼女は賽銭箱に投げ入れたのです。

主と彼女の出会いでの焦点は、献金が少額であることではなく、彼女が生活費の＜全部＞をささげたということにありました。１枚を残すことも出来たのに、２枚全部献げた、ここにこの話の特色があります。有り余る中からする献金と、全部をささげる献金には、額の比較とはまったく別の世界があるからです。しかも、このすべてを献げるという行為には、一般的社会的秩序や常識を覆すもの、まさに非常識な行為と言えるものでありました。しかし、この比較を絶した献金をしたこの寡婦を、「主は、目に留められた」のでした。

ここで主が言われたのは、寡婦のこの行為を単なる努力目標として私たちに示されたのでも、献金を奨励しておられるのでもありません。主が私たちに教えようとされているのは、この女性の行為が＜終末的な行為＞である、ということです。つまり彼女がしたことは、神と最終的に出会い、その前に立たなければならない終末的出来事に於ける行為でした。従って聖書は、この出来事こそ、神殿の中での主の言動の最後の締めくくりに相応しいものとして、ここに記したのです。

聖書には、主イエスが弟子たちを呼び寄せて、「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。・・・」（同１２：４３ー４４）と言われたとあります。主がこの「はっきり言っておく」「まことにまことに汝らに告ぐ」と発した時は、必ずそれに続けて主は、大切な教えを説かれるのです。この出来事もそうでした。「宮浄め」に始まる境内での主の言動は、すべて終末に関するものでした。ですから、それらすべてを一つに纏めて、終末の時を告げその内容を告げるこの出来事を通して、主は私たちに＜終末＞と向き合うことを、切に求めておられるのです。

終末は遠くにあるもの、いつか来るかもと言うのが私たちの認識ですが、しかし＜終末＞とは、神は、主は今ここに来られたということ、つまり終末はもう既に私たちの方へ来ているということなのです。そう、この主との出会いこそが、私たちの終末の出来事であることを、主は寡婦の非常識な行為を突き付けることによって、私たちに示されたのです。つまり、この世にあって終末の世に生きることを味わう、すなわち神の国を味わうとは、この世から排除されて主イエスの命の中に生きる者のみが、味わい得るものであるということです。貧しい寡婦がその意味を知らず、絶望的な気持ちも手伝って２枚の銅貨を投げ入れた、その時です、彼女のその手の業は、終末的行為として、主の目に留まったのでした。

今、主イエスは私たちに寡婦のようになりなさいと言われている訳ではありません。主が言われた言葉は、「わたしはあなたのために命を捨てる」ということです。その言葉を頂いた私たちに出来ることは、＜十字架上の主イエスを仰ぎ見、己の罪を悔い、主に従って行く喜びの中に生きる＞ということです。

（説教要約　羽入田悦子）